上演２ ２０２５年7月２６日（土）　２校目 九州ブロック（鹿児島） 鹿児島県立伊集院高等学校 「朝は明けたり」	第４９回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第７１回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会　担当委員 専修大学松戸高等学校（千葉） 岡本　瑛美里

この作品は、MBC という実際にあるラジオ局に関する実話を基に描かれている。日本返還が決定した当時アメリカ領であった奄美大島に MBC 社員の岩橋と古川は密航して現地取材を行うことになる。2 人を出迎えてくれた島民の勝子は、自ら取材を受けたいと言い、それに応じた 2 人は勝子の兄について取材を始める。

場面は戦後まもない頃に移り変わる。まだアメリカに占拠されている頃の奄美大島では配給が高騰し、お金が無くて買えない人がいたり、米軍に物乞いしてまで食料を貰おうとしていたりとアメリカに見下されてるかのような状態で生活していた。勝子の兄であり機関誌の編集長を務めている満と同じく機関誌で翻訳係を務めている実吉は物乞いをしている島民に対し、「島民の誇りを忘れたのか」と訴えかける。しかし、島民達はそうしないと生きていけないと抵抗を諦め、嘆いていた。この場面から私は、自分達が惨めな思いをしてまで食料を貰い、生きていかなければいけないという惨状にどうしようもない絶望を感じた。

私が特に印象に残っているのは、俊恵が満に対して思いをぶつけるシーンだ。いつもは編集長と呼んでいたのに、この時は、名前で呼んでいた。それだけ、満を心配する気持ちが強く、自分の思いを伝えたいという強い姿勢に心を打たれた。また、MBC 局員の 2 人も「地元の情報は地元が伝えるんだ！」と地元の一員としてニュースを届けようとしていた。最後にスクリーンに実際の岩橋さんと古川さんの写真を映すことで、これがフィクションではなく、史実に基づく作品なんだと言うことがわかり、胸が熱くなった。

方言や美しい三線の音色、俊恵の歌声が物語の没入感を高め、奄美大島に対する深い郷土愛が伝わってきた。また、アメリカや NHK といった大きな権力に立ち向かう勇気、諦めずに進み、想いを最後まで主張する大切さに涙した。

日本に帰れることがわかった後にフェンスが取り払われ、開放的な空間が広がったところに、自由を手に入れた晴々とした気持ちが伝わり、私たち観客も奄美の人の気持ちと同化して、心の底から良かったと思えた。

アメリカに統治されパスポートがなくては帰れない当時の人にとって、日本に帰りたいという思いには、並々ならないものがあり、当たり前が当たり前ではないことなんだと深く考えさせられた。アメリカの領土下にあった歴史を現代で取り上げる意味、そういう歴史があったことを覚えておかなければいけないという声が講評委員から挙がった。自分の思いを伝えたいという強い姿勢に心を打たれた作品だった。